

瀧井孝作ノオト(六)

唐 井 清 六

瀧井孝作は「ツチグモ」「海紅」に作品を発表するより前に、荻原井泉水主宰の「層雲」(明治四四年四月創刊)、大阪の俳誌「紙衣(カミコ)」(明治四五年七月創刊)にも意欲的に句や文章を寄せている。

「層雲」に折柴の署名ではじめて句が載るのは明治四四年七月発行の第一巻第三号で、以後大正三年四月発行の第四巻第一号に至るまで二三冊に五八句を発表している。そのうち大正元年一二月の「層雲」(第二巻第九号)に掲載された「有馬まで」一〇句は『定本瀧井孝作全句集』(中央公論社、昭和六十年三月)に収録されたので省き、ここでは四八句を録した。

「紙衣」に同じく折柴の署名で句がはじめて載るのは明治四十五年七月発行の第一巻第一号で、以後大正三年九月発行の第三巻第八号まで十八冊に一九六句を発表している。そのうち「ツチグモ」刊行と時期の重なるものには「ツチグモ」所載の句と重複する句が七句あり、ここにはそれを省いた一八九句を録した。

調査には「層雲」「紙衣」とも神戸市立図書館のお世話になったが、「紙衣」は第三巻第二号が欠号、また第三

卷第十号までしか所蔵されておらず、以後のものを発見することが出来なかった。

雲層々 井泉水選

水温む

牧の湊といふ筏場や温む水

木の實植 寒山選

神山に木の實植えぬ日の輪負ひ戻る

(「層雲」第一卷第三號・明治四十四年七月十日)

螢 紫人選

螢谷麓造林に家居して

○ 巨鬼工選

藍作見に來て宿螢見に酌みつ

夏近し 碧梧桐選

白魚築の楮殻錆び夏隣る

(「層雲」第一卷第四號・明治四十四年八月十日)

雲層々 井泉水選

短夜

募集文に燈臺日記明易き

薰風

松尾詣でし薰風や川も夕榮えす

水鶏

繪本見に訪ふ文庫なる鳴く水鶏

青梅

繭掃ひに大日覆青梅たわゝ

梅黄ばみ落つ日より受験心張る

(「層雲」第一卷第六號・明治四十四年十月十五日)

萩 櫻碗子選

千鳥獵見ぬうらみ川邊萩に來て

△ 田士英、雪人共選

藁灰汁なども大洗濯日萩埃る

(「層雲」第一卷第七號・明治四十四年十一月三日)

銀杏 乙字選

軒銀杏千鳥賊綴る藁干せり

(「層雲」第一卷第八號・明治四十四年十二月五日)

短日 六花選

石の色を花かとも垣根日短き

(「層雲」第一卷第十一號・明治四十五年二月十一日)

扇 三汀選

樹下を鶉匠が扇みづくし妹許りに

扇休むも峽の風頬を羽搏つ鳥

扇風もはかな御炎上跡の晝の月

紫人、四明共選

都の扇選り買ふ日貝博士訪ふ

(「層雲」第二卷第五號・大正元年八月五日)

雲層々 井泉水選

涼し

扇氣付けしが書ミを忘れし友涼し

(「層雲」第二卷第六號・大正元年九月一日)

作者百六十六名。選者露石月斗墨水外七名。

五點

刈り残す麻や野の酒舗月ほのと

四點

月に倉庫掃き終えぬ浪の音なかり

(「層雲」第二卷第七號・大正元年十月一日)

○天下茶屋子規忌(於大阪、紙衣社)

校舎裏は墨捨て菜畑秋の風

(「層雲」第二卷第八號・大正元年十一月一日)

山茶花 六花選

茶山先き買ひを晴るゝ山茶花に酌めり

(「層雲」第二卷第十號・大正二年一月一日)

時雨が晴れて

汐見橋驛より長野行電車にて

稻城原すりぬけぬ金剛晴るゝ

河合寺

摺りて後碑にあがく蟲や今朝の冬

南河内の村道

誰も覗く畔井なん冬の水馬

柿林の下芝に寝そべる人あり

柿は摘まれて風の影枝々の晝に

觀心寺

冬薔薇寺寶拜觀を單りして

檜尾陵

陵山の水はけを土管替ふ小春

瀧道

山茶花に粉屋埃り今日は寸積る

鬼住延命寺へ山越

棕櫚の實に手届けば折りて岨を行く

鬼住の邑

伐り禿げ山燈籠の柱残る道

延命寺

遙か來しが小春暮る御堂疊掃く

歸途

千早わたり月代に鳴くは鵲か

暮れきつた道を水音さゝつゝ行く

十一月の田に牡蠣殻を積む月夜

三日市

冬夜空に灯の明き藁屋機械鳴る

長野驛構内

紅葉もて來しがペンキの香沁む室

(「層雲」第二卷第十一號・大正二年二月一日)

俳句會報と雑感と消息と

滄浪水壺入營送別句會(大阪船場仁託寺)

手毬そるゝ庭鶯の來て霜晴るゝ

(「層雲」第三卷第一號・大正二年四月一日)

六甲まで

昨日京都に迎へたる鋤雲翁と吟行す

語りほうけて歩す二人春田乾き行く

鋤雲翁の愛みを思ふ

蒲公英莖みぢかし吾はちさきもの

六甲に登れる六甲中學の生徒等

春休み縮ね葡萄の蔓を解く

梅 寒山選

船の齡ひ砂ずりの煩ひ梅見人

(「層雲」第三卷第二號・大正二年五月一日)

堂島吟社俳三昧(大阪市堂島)

第八夜

摘草暑し蹩車を曳いてやる

(「層雲」第三卷第四號・大正二年七月一日)

俳句會報と雜感と消息と

畿内・幽耳君來阪紀念句會(大阪堂島秀咲居)

蚊の隈々家小さし夜天鏡なす

(「層雲」第三卷第五號・大正二年八月一日)

俳句會報と雜感と消息と

畿内・水無月吟社(大阪市北區堂島中二丁目)

瓜割れば屋棟くつきりと夜空白口

(「層雲」第三卷第六號・大正二年九月一日)

俳句會報と雜感と消息と

畿内・波靜氏來阪句會(大阪堂島)

甕の据り朝顔の開く影か這ふ

(「層雲」第三卷第九號・大正二年十二月一日)

瓦會主催新年俳句大會(大阪北區堂島)

地軸のきしりやはらかにかなで初東風す

木株平めに神集ひまし初東風や

(「層雲」第四卷第一號・大正三年四月一日)

日傘 章四知選

最合ひ日傘魚活けし甕抱く連れと

章四知 游魚選

鹽田主の大法要日傘影濃き日

(「紙衣」第一卷第一號・明治四十五年七月十二日)

雲の峰 墨水選

船料理澱む水見ても雲の峰

抱けば動く草苞のものや雲の峰

紫陽花 花地橙

紫陽花簍の水音笹魚を持つ道に

巢父思ふ木あり籠鳥紫陽花に

各地俳句

紙衣俳句會(八月十七日紙衣社にて)

蝙蝠

梯子桑暮れて摘むまじき蝙蝠に

椽の香の佇ませ橋蚊喰鳥

天下茶屋俳句會(七月廿一日聖天阪下瓢々亭にて)

風鈴

馬の鞍に風鈴や里は柑橘に
新ら草鞋反る道途風鈴強吹いて
風鈴や炉に迫る花不斷の庭

夏柳

むくつけき嶽が覗く街の夏柳
獸飼ふに窟構う家夏柳
桑に交る葉柳や稗は捨て細か

鋤雲折柴來阪句會（七月十二日夜會者十人紙衣社にて）

扇使ふ音澄めば芝ずりの舟

扇淋し都裏竹の落葉山

嵐峽館偶會（京都嵯峨 七月七日）

よべの花輪思ふ蚊帳の鑰鳴る旦

花木なき雨の宿晝の繪蚊帳あり

（「紙衣」第一卷第二號・大正元年八月三十一日）

花野酒店山外漆に目まじろく

車轟る花野來て工場梅嫌

紙衣俳句 六花選

選鑛の水漏れて芝生夏の月

登山落伍の一人寢に帳蚊の片はづし
今日の險を蚊帳に思ひ胴亂に倚る

清水 櫻碗子選

竹皮拾ひに徒歩鶉羽ばたく清水あり
洞に入る時蠟涙の花を見る清水

灯取虫 寒骨選

水番の命火に双蛾ましろく夜

灯取虫鈎針に羽毛細工せり

紙衣五句集

青嵐互選結果作者四十七名選者十二名

五點

青嵐に實綴る木玉蟲や降る

二點

青東風の葉裏白口まして濱の木々

各地俳句

紙衣俳句會子規忌（五月十九日夜仁託寺に於て）

秋風十句、作者、選者、各廿八名

六點

校舎裏は墨捨て菜畑秋の風

天下茶屋俳句會（九月一日聖天阪下瓢々亭に於て）

秋晴十句、作者選者共二十一名

四點

抱く鳥に櫛入れて果樹秋晴る、

二點

切り株も堀らる秋晴野道伸びて

同

大洗濯の萎む腕倚す樹秋晴る、

笑風來阪句會 (九月十日夜紙衣社にて會者十三人)

蜻蛉淋し日覆竿にも鳶の這ふ

(「紙衣」第一卷第三號・大正元年九月三十日)

灯籠あぐるに沼木の間見る違なみ

紙衣俳句 六花選

梯子桑暮れて摘むまじき蝙蝠に

積兩岸の茨盛り出材了へし山

秋郊吟行

北野、新淀川、十三、三國、服部、豊津村、吹田

○

萩の鳩寝そびれて羽がひ抱く砂も

萩の影の斑をありく鳩の眼くらます

○

眼白籠護謨樹覆ふ家に川激む

○

柴脚の漉す水芋の莖染めて

ポプラ做ひのかまつかを影呼びす水

○

十三手前の糯田に工場の菜(活字欠損)畑

堤二夕重の橋は親子とも葭芒

網錘喰ふ砂を見るる秋の水

○

晒布棚を葡萄棚を隔つ芒刈る

蝨踏んで畦芒トケかさゝるもの

コロと居る秋蛙蕾割る茶あり

月見草の永咲きや蝨羽明りす

堤一望黍並めて藁船も行く

○

田船遅々末枯草の籠に倚る

鳴く沙魚を思ふそよぐ葭根をも揺る

川柳の葉白みや蓼風枯れに

牛の脊抛り場の糸瓜藪をなす

荷積み様う牛鉢巻の秋晴るゝ

赤蜻蛉の眼を戀ふて實茨伸びよかや

薊を撫子を遊びまどいして秋晴るゝ

田へ土管を噴す里稽穂の青き

藁細工乾す校庭や渡り鳥

松ふぐりを稻田へ蹴りぬ鳴立ちて

稲の波も見ゆ垢離場水の石叩く

○ 砧調度と見ゆ田清水に蕙敷く

豆殻を干すを踏む音を鳴く家鴨

木紫苑もかまつかも錆びてすがれ逢ふ

○ 蝨ハジク夕畦豆の夾鳴りも

製板の焚火おどとや枯帚木

○ 水引の花見ざり短吟行な

各地俳句

紙衣俳句會（十月十一日夜仁託寺に於て）

百舌鳥十句。作者、選者、各廿一名

三點

百舌鳥淋し柏染め残す櫛山に

二點

雪舟研ぎの冬思ふ坂を百舌鳥晴らす

月囚君來阪句會（十月十九日夜紙衣社に於て）

藪かまつか畑隈は蕎麥のうつり色

（「紙衣」第一卷第四號・大正元年十月二十五日）

開繭法釜場に堰を柿の主

柿まゝら菜洗ひに里は築も干す

雪の乗鞍冴ゆ柿を畚振り賣りに

各地俳句

美津會五句集（大 島の内）

松山下虫宿の菜畑貝割りて

落袖拾ひ溜む机上虫籠も置く

花野 天郎選

山花野の御料林日入れ空地ある

（「紙衣」第一卷第五號・大正元年十一月二十五日）

大葬よりの雨枯櫻御降りす

春の夜風豪溪に蔓ものゝ伸び

寒雀の毛立つ朝キヤベツ雨含む

横掘所見

小白木を曳き疲れしげまれ霜に

紙衣俳句 六花選

間引菜も十畦目や秋水面て射る

物憚る燈籠や膝は机下の闇に

花火會晝は樽俎る穂蓼吹く

百舌鳥鳴くや柏染め残す樫山に

柿まばら菜洗へる家築も干す

各地俳句

紙衣俳句會 (十一月二十三日紙衣社に於て、東京六石、満

洲三坡來阪)

二點

避寒人を物そゝる苞の蟹赤き

蕪村忌句會 (十二月二十五日紙衣社に於て會者二十名)

四點

槐巨車寄せに埋火を守る

埋火の朝まだき糸竹さゞめまで

二點

密柑番が淡き虹見る埋火に

美津會 (十一月二十七日於船場仁託寺)

水壺、滄浪入營送別句會

霜ひゞき芋をうむ前の三砵も

毛毬そゝる庭鷺の來て霜晴るゝ

掃きて後夜を霜に貌すれゝ語る

秋の俳十夜 碧梧桐選

第二夜 朝寒

料理工夫を朝寒に堪へつ山葵萌ゆ

朝寒み毘にも火繩教へせる

第三夜 花火

花火せし濱巨貝の蓋開けぬ

第四夜 虫

虫夕かくて消息も則る字

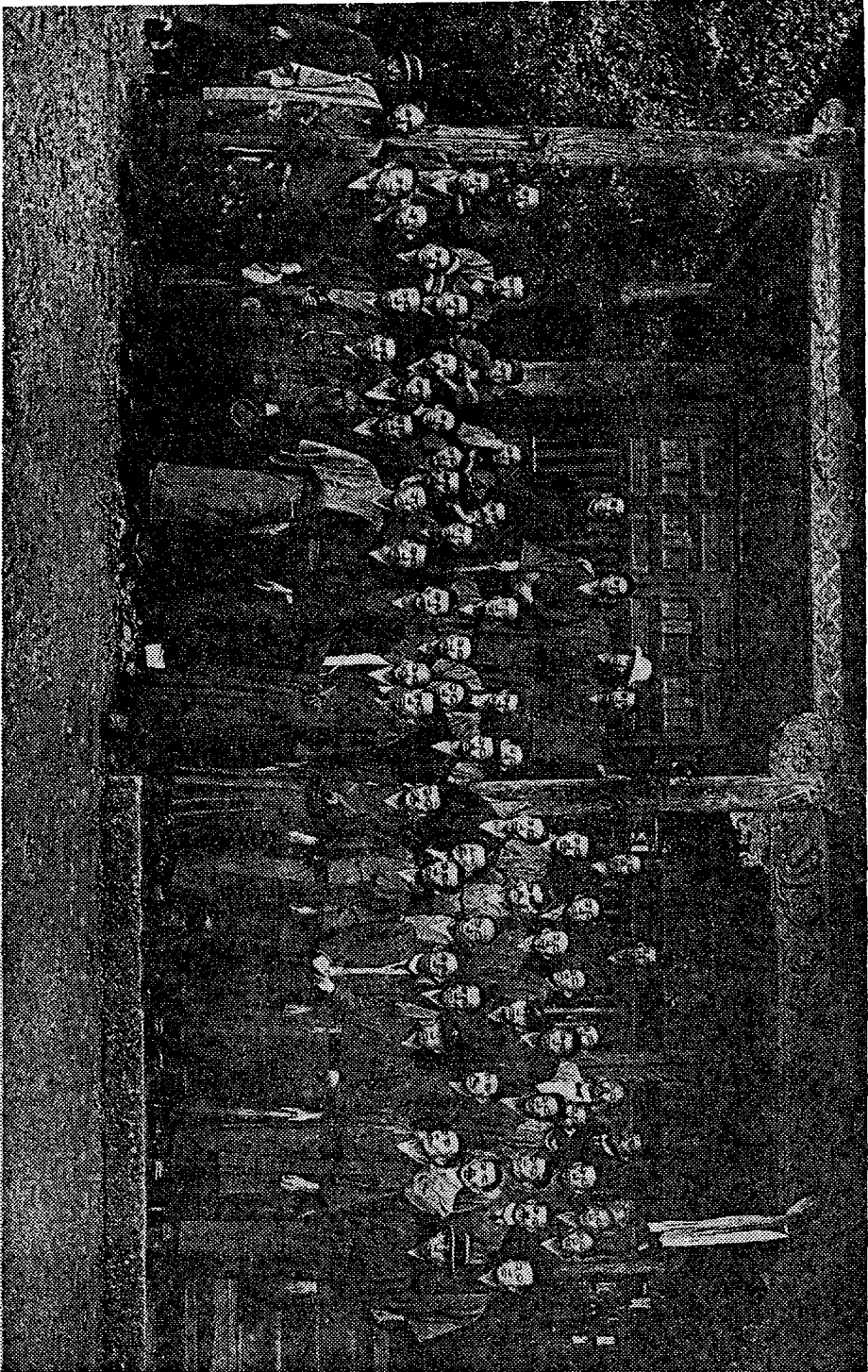
第五夜 秋の水

露佛こまやかに見るとす日ざし秋の水

第六夜 野分

野分してそなた酸漿藥染む

第十回 山中 大寺 阪 子 規 忌 (中)



前列) 三人宮田(洋)、桃柿、墨水、秋双、中山寺住職、水明郷、朽咲、棹
江、二人、落葉、三人
第二列) 鬼史、游魚(洋)、九日庵、二人、米神、雪明、紫則、一人、章四
知、白金屋、易川、三壽、臨川、汀風、八十瀨、井弘、北渚

第三列) 菊泉(洋)、折柴、北迷子、雪骨、一人、潤、露石、秀咲、乙山、月
斗(柱)、小松月、木人、小姑、春沙、射弩(洋)、富露、一人、白峯、一人
第四列) 琥珀、一人、(柱)、神舜、草迷宮、醉峰、孤城(洋)

(「紙衣」第一卷第六號から)

第七夜 紅葉

碑守りて習ふ紅葉の打ち榮ゆれ

(「紙衣」第一卷第六號・大正二年一月二十五日)

爐塞ぎて獨樂うなる虚無のよろこびを

紙衣俳句第七集 六花選

ポプラならひのかまつかや影呼びす水

句會

紙衣俳句會 (二月十一日於紙衣社)

四點

遊び醒めて田へ灰を蹴る牙返ゆれ

牙返る銀杏焙く爐火青むめり

牙返れ摘み遅そ芹の香を追ふに

二點

飾り朱欒けふに色移る春牙えて

牙返る鷹も地漁りの大磧

飛彈の鋤雲來阪句會 (紙衣社に於て 二月五日夜)

三點

鳩の輪を塔原の旅や春の山

洛に田ある朱雀路春の山離れ

二點

越し鹽の平春山に松露ある

(「紙衣」第一卷第七號・大正二年二月二十五日)

残る雪今は着惜しみを白川女

雨の月残雪を小股行く隈に

貌のみの風や残雪を峯離るゝ

残る塵雪むざと搔く庭に蛙や立つ

残雪のよごれ舎や逢ひあぐむ戀

狐が尾玉無くす心日さす残雪に

山容は知らで残雪の大きな夜

残雪を放れたき笹魚雲に遊ぎたき

かほど手紙の皺がかげろう嶽四圍に

陽炎の消ゆる待ちつ逢ふ夜の衣裳

紙衣俳句第七集 六花選

吾が蹇短日を紙魚の這ふも讀む

霜響宇をうむ前の三砦も

氷初む日つゝまやかな食事苦が百合を

冬坐敷鳩杖の賀にもみやげ積む

寒雀の毛立つ朝キャベツ雨ふくむ

寒雀藁荷積みあえず動く貨車

大阪俳談會 (三月十八日夜)

揚げ雲雀の爪を見よ茅の積抽んずる

各地俳句

紙衣俳句會 (三月十五日夜紙衣社に於て)

三點

桃林盡く瀧叩く岩の晝灯

二點

よろこびの涙乾く桃に紫烟あり

桃並めて朴も立ち交る白日よ

梅句集披露 (藤原游魚主催、高點順に依て配列す)

笹そこばく踏み折りし棚田綴る梅

(「紙衣」第一卷第八號・大正二年三月二十五日)

水温めば身を刺す筆の抜け毛あり

躑躅明けて握り飯ぬくき首途なる

そこら摘み盡くす草に笑ひハタと絶ゆ

笑ふ山夜となり奈落へ落す湯か

山笑む夕斯の木に彼を行り過ごして

兩手開けてありきぬ巢鳥落ちしより

蠶を抓まむ差しき指に灯まともな

青朴葉に水滌ぐほどの身だしなみ

若葉蒸れて味噌の重しに聲のある

撒水ほとばしれ浪の池ながら

紙衣俳句第九集 六花選

春山や雨流れたもつ臺のもの

紙衣句會

高岡の竹の門、満花城、白雨城、満州の三坡君を迎へて

(四月二十二日)

三點

明けて行く夜のけはい跨ぐ蠶莖に

二點

紙に包む蠶の息きを掌に木下闇

二人ゐて棚こぼれ蠶にうづくまる

(「紙衣」第一卷第九號・大正二年四月二十五日)

蚊の隈々家小さし夜天鏡なす

蚊のそよ風漆乾くやと覗ひぬ

濡るゝ闇に釣瓶まざと蚊の流れ来る

朴の花に手翳せば謀叛逃げて行く
朴の蓋が面貌にかぎろひつ脊丈け伸ぶ
散る朴の花が葉の上に萎え行くや
朴の一瓣ほぐれ展ぶ其處に木影浮く
棗咲いて光明な肌よ白重

紙衣俳句會 (五月十九日於紙衣社)

二點

明う暮れしまゝ路の下を酒氣の這ふ
日を透かす路に寝て擱む麥稈を

(紙衣) 第一卷第十號・大正二年五月二十五日

蚊火煙るそのまゝ消えぬ雨露匂ふ
障子一枚色虫の生きて晝蚊遣
己が身幅煽ついきれを蚊遣ろふと

紙衣俳句第十一集 六花選

残雪や何甲ふ歩荷背平めな
椿森を風そるゝ澤面白らけては

五の日會 (六月十五日於紙衣社)

二點

灯しても夕永し實梅暑うある

黄梅ころと大地を撥じきありく蹠

碧梧桐氏來阪句會 (六月二十五日)

螢ともす櫻の實目はなれぬもの

(「紙衣」第一卷第十一號・大正二年六月二十五日)

句録

山の影山に澱む雲の峰の影に

甕の据り朝顔の開く影の這ふ

(「紙衣」第一卷第十二號・大正二年九月十日)

子規忌 (九月十九日於紙衣社)

三點

火をくゞり來てし白洗ふ秋夕

(「紙衣」第二卷第一號・大正二年十月二十三日)

五の日會 (十一月五日於瀧丘庵)

見ればあまりの冷めたさをかなしむしる菊

菊を染めたく己れの動搖に堪えぬかな

(「紙衣」第二卷第二號・大正二年十月二十三日)

自選句

避寒の睡時計の針に守らせつ

霜の原爪ま立に人は何處までか
霜の敷葉めくればホノと何の息

五の日會

題。時雨

舟を捨てたき時雨が水につく處
時雨の脚交^かふさやか雪くるらしも
題。水鳥

浮寐鳥の脊なの冷めたさの雨が降る
蒼空うけて浮寐鳥水の深さかな

題。山茶花

山茶花や家の眼の窓が活きくと
働きながら暮るゝ山茶花散り忘れ

(「紙衣」第三卷第一號・大正二年十二月二十九日)

自選俳句

幹を根をかへりみ垂るゝ柳かな
芽伸ぶ藻に池の小さゝ浪あらぬ
春の水に消え惜しみ這ふ烟かな

五の日會

法隆寺に行きて三句

塔の影のつゝましき大地芽ぐまなむ

枯草は靡きつくして春や來ぬ

塔原はものゝ枯れ敷く二月かな

(「紙衣」第三卷第三號・大正三年三月三十日)

五の日會句稿

酒黄なり疊の上に春惜しむ

(「紙衣」第三卷第五號・大正三年六月二十五日)

五の日會句稿

晝の浴衣をすつきりと立つ葵かな

(「紙衣」第三卷第七號・大正三年七月二十五日)

五の日會

梅干の籠の目動く日蔭かな

梅干や照る日にむせぶ色褪せつ

葉の撚れのもどる青稻香吹くかな

歸省して(二句)

日入りては全き夏の野邊の草

清水流れて影映すより水嵩ある

(「紙衣」第三卷第八號・大正三年九月二十五日)